活 動 報 告

〈活動報告〉

ロシア連邦との交流

ロシアとの交流は，嶺井明子教授を中心に以前から活発に展開されてきたが，文部科学省の「平成26年度 大学の世界展開力強化事業」に筑波大学の取組み「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」（略称：Ge-NIS，H26-30）が採択されたことを受けて，ロシアの大学との学生交流を深めるための基盤が一層強化された。

2015年３月10日～21日にかけてGe-NISプログラムの海外研修が行われ，学類生・大学院生50名および教職員８名が，４つのコース（サンクトペテルブルク・モスクワコース，ウラジオストク・ノボシビルスクコース，カザフスタンコース，バルトコース）に別れロシア・カザフスタン・バルト三国の各国・都市を訪問した。この際，2014年12月からGe-NISプログラムの国際交流アソシエイトとして採用されている教育基礎学専攻のミソチコ・グリゴリー氏がサンクトペテルブルク・モスクワコースの引率スタッフとして同行した。教育学類からは４名の学生がそれぞれのコースに参加した（増田康介＝２年・バルトコース，上間彩夏＝２年・ウラジオストク・ノボシビルスクコース，舟久保亮太＝１年・ウラジオストク・ノボシビルスクコース，柏﨑賢吾＝１年，カザフスタンコース）。このうち増田康介は，その後Ge-NISの正式なプログラム生に選抜され，平成27年９月からロシアのモスクワ市立教育大学に１年間留学することが決まった。

Ge-NISプログラムの採択を受け，筑波大学は2015年２月および３月にモスクワ国立大学をはじめ，ロシアの５大学と新たに交流協定を締結した。交換留学生の単位互換や留年しない形での留学の実現を組み込み，活発に交流活動を展開しているのは嶺井明子教授が連絡調整責任者を務めるモスクワ市立教育大学である。

2015年２月15日に東京の虎ノ門ヒルズフォーラムでGe-NISプログラムのキックオフシンポジウム「グローバル社会における新しい大学像を創る」が開催され，モスクワ市立教育大学一行５名が招へいされた（レモレンコ・イーゴリ学長，アグラナト・ドミトリー教育担当副学長，グリンシクン・ヴァジム国際担当副学長，ストリジャック・ウリアナ日本語学科長，クズネツォヴァ・ソフィア日本語学科上級講師）。レモレンコ学長は2013年６月まで連邦教育科学省の副大臣を務め，ロシアの教育改革に長年携わってきた経歴を持つ。同学長から学校見学の希望がだされたところから，樋口直宏教授の調整のもと，小中一貫教育を実践しているつくば市立春日学園の訪問が実現した（２月16日）。嶺井明子教授とタスタンベコワ・クアニシ助教が同行した。

この他，モスクワ市のエヴリカ教育政策研究所との研究交流は特筆される。同研究所の研究部長であるアダムスキー・アレクサンドル氏は1980年代後半のペレストロイカ期から革新的教育実践に関わり，ロシアに移行してからも継続して精力的に改革運動を推進している人物である。同研究所の所長を務めるアントーノワ・アーラ氏と共に，2015年３月６日～17日に教育調査のため初来日し，３月11日に筑波大学を訪問した。その際，藤田晃之教授が文科省の近年の教育改革について報告を行い，両氏と日露の教育改革の動向について英語で意見交換を行った。来日中，両氏は東京都品川区立豊葉の杜学園，茨城県牛久市の牛久文化幼稚園（認定こども園），牛久さくら保育園，栃木県立宇都宮工業高校，栃木県立宇都宮商業高校，東京都渋谷区立臨川小学校・幼稚園，東京都港区の聖心女子学院を訪問し，教育基礎学専攻院生のミソチコ・グリゴリー氏が同行し通訳を務めた。

（文責：嶺井明子，ミソチコ・グリゴリー）

〈活動報告〉

カザフスタンとの教育・学術交流

―カザフ国立教育大学を中心に―

教育学域のカザフスタンとの交流は，2013年５月に人間系にカザフスタン出身のタスタンベコワ・クアニシ助教が採用されたことを契機に活発化した。2014(平成26)年度には教育学専攻の「中央アジア諸国との国際連携による教育・研究のグローバル化の推進」が人間総合科学研究科戦略プロジェクト（国際・社会連携教育推進）に採択された。プロジェクトの目的は，中央アジア諸国との交流開拓の第一段階として，カザフスタンを対象国とし，特にカザフ国立教育大学との相互の訪問と共同セミナー，国際シンポジウムの開催を通して，今後の研究交流，院生交流のための機構構築に関する基盤整備を行うことであった。筑波大学はカザフスタンの４大学と交流協定を結んでいるが，教育学研究および教員養成分野をリードするカザフ国立教育大学とは協定は締結されておらず交流の実績はなかった。カザフ国立教育大学（1928年設立）は，カザフスタン初の大学（国立）であり，学生総数は現在約１万人である。世界25カ国の95大学と交流協定を結んでおり，2014年９月にはフランスのソルボンヌ大学の分校（修士課程）を設置した（キャンパス　イン　キャンパス）。大学間での教育・研究交流を通して，共同研究の実施や教育インターンシップの受け入れ先の確保ができ，教育学域の教育・研究の国際化が期待される。

2014年10月30～11月４日，教育学域教員５名（清水美憲　教育学専攻長，井田仁康　教育学域代表，濱田博文　教育基礎学専攻長，嶺井明子教授，タスタンベコワ・クアニシ助教）がカザフ国立教育大学（アルマティ市）を訪問した。カザフ国立教育大学では第一副学長エルマガンベトフ・ムバラック氏に表敬訪問し今後の交流の見通しについて話し合った。その際，翌2015年3月に筑波大学を訪問するように招へいした。また，大学教員・学生たちを対象に筑波大学の紹介を行った。この他，アルマティ市立第27番幼稚園（マメチアロヴァ・ラシダ園長）やアルマティ市立第130番ギムナジウム（スマグロヴァ・アルダック校長）を見学し，また，アルマティ市郊外のボレック村初等中等普通教育学校（アフメトヴァ・グリザダ校長）を参観した。

2015年２月28日～３月６日にカザフ国立教育大学一行４名が本学を訪問した（教育学・心理学研究科長ケネスバエフ・セリック氏，ソルボンヌ大学分校長ヌルリヒナ・グリミラ氏，国際担当学長補佐官イスカコヴァ・アイグリ氏と国際教育プログラム担当ショカノヴァ・アクマラル氏）。教育学専攻の主催で開催された人間系FD 国際シンポジウム「教育の質保証と現代教育改革」に参加した。カザフ国立教育大学からは「カザフスタンの教育改革―グローバル時代の競争力ある教育」（イスカコヴァ・アイグリ学長補佐官），「カザフ国立教育大学の国際化―ソロボンヌ大学分校の設置について」（ヌルリヒナ・グリミラ　ソロボンヌ大学分校長），教育学域からは「日本の小中一貫教育について－義務教育の新しい姿」（樋口直宏教授），「日本のキャリア教育の新展開」（藤田晃之教授）についての発表があり，質疑応答並びに今後の交流について意見交換が行われた。今後は交流の第一歩として院生の論文投稿の場として相互の研究紀要などを提供することで合意した。この他本学のベントン・キャロライン国際担当副学長への表敬訪問，筑波大学附属小学校，つくば市立輝翔学園（小学校と中学校），つくば市教育局総合教育研究所の見学を行った。

以上の実績を踏まえ，カザフ国立教育大学との交流のいっそうの活発化を図るため大学間交流協定の９月締結を目指し準備中である。

（文責：タスタンベコワ・クアニシ）

〈活動報告〉

メルボルン大学及び関連組織への訪問

本プロジェクトは，筑波大学の「革新的な教育プロジェクト支援経費」により，国際バカロレアの趣旨を踏まえた研究・教育のグローバル化への革新を図り，我が国の教育学界における国際交流・情報発信の拠点構築に向けた先導的プログラムの開発を行うことを目的として実施された。その際，すでに継続的な研究協力関係を形成しているメルボルン大学との研究ネットワークを院生の連携指導プログラム開発に向けて拡充し，教育学関連３専攻及びヒューマンケア科学専攻共生教育学分野の協働による将来の国際連携共同専攻構築に向けた基盤的作業を推進することにした。

上記の目的のために，平成26年７月よりメルボルン大学との連携についての交渉を重ね，平成27年３月15日～20日に，清水美憲教育学・学校教育学専攻長，大塚慎太郎人間系特任助教，院生３名（教育学専攻：小山田建太，学校教育学専攻：細矢智寛，教育基礎学専攻：ピン・チャンキア（Chankea PHIN））をメルボルン大学に派遣して国際共同セミナーの機会を設定するとともに，関連教育機関への訪問と意見聴取を行った。また，これに関連して，院生の研究内容に関する共同ワークショップを行った。

今回の訪問では，メルボルン大学の研究組織国際授業研究センターのセンター長デビッド・クラーク（David Clarke）教授，および同大学マックス・スティーブンス（Max Stephens）教授と今後の連携のあり方を討議するとともに，国際バカロレアの教員養成の実際について意見聴取をし，双方の大学院生参加による共同セミナーを実施した。共同セミナーでは，センターのスタッフや院生も含めてお互いの研究内容について議論することで，グローバルな視点から自らの研究内容を捉えなおす機会が得られた。さらに，クラーク教授らが企画する先進的な研究プロジェクトについて知る機会も得られた。

また，ヴィクトリア州の教育省にあるカリキュラム・評価局（Victorian Curriculum and Assessment Authority: VCAA）で責任者のデビッド・ランカスター（David Lancaster）氏を訪問して州教育システムについての討議を行うとともに，メルボルン大学に隣接する高校（University High School, Elizabeth Blackburn School of Sciences）を訪問して理数系の先進的授業を参観し，担当教員と討議した。ランカスター氏との討議では，ヴィクトリア州におけるカリキュラム開発や評価について説明を受け，日本との比較を通してヴィクトリア州の教育がより職業達成や技能獲得に重点を置き，教育と労働の接続がより具体的に想定されているという特徴が明確になった。一方で，訪問した高校では，先進的な実験・教育設備が設置され，それらを用いた研究成果がポスターとして掲示されていたり，通常の授業でも教師は積極的にICTを活用してより多様な表現を用いたり，先進的な科学教育を進めている学校があるという現状も認識できた。

これらの活動を通して，院生の研究のグローバル化への足がかりが出来，今後の両大学間での交流に向けた基礎を固めることができた。特に，メルボルン大学のスタッフ・院生との研究交流を持ったことで，本学院生の視野が日本だけでなく，世界に向けられたことは本プロジェクトの大きな成果といえる。

今回の訪問を，筑波大学とメルボルン大学との部局間，あるいは大学間での交流協定締結に向けた教育研究ネットワークの構築の契機とすることが期待される。メルボルン大学は教育学分野で世界第２位にランクされる大学であり，「世界21研究大学グローバルネットワーク」の１つであるが，共同研究を推進する可能性についても討議を継続していく。

（文責：清水美憲）

〈活動報告〉

人間総合科学研究科・革新的な教育プロジェクト「人間系大学院生の国際協働教育のための東アジア・グローバルコンソーシアムの構築」にかかる教育研究交流

（中国東北師範大学派遣報告）

人間総合科学研究科の人間系専攻群（前期教育学，後期教育基礎学，後期学校教育学，前期心理，後期心理学，前期・後期障害科学）は，平成26年度の「革新的な教育プロジェクト支援経費」として「人間系大学院生の国際協働教育のための東アジア・グローバルコンソーシアムの構築」というテーマで採択され，大学の経費を得ることができた。かねてから教育学関連の３専攻１分野では，中国からの留学生を数多く受け入れて，教育学研究者養成のグローバル化を推進してきた。本年度はこの経費をもとにして，さらに優秀な留学生を数多く獲得するとともに教員と院生の研究上の国際交流をこれまで以上に発展させていくことをねらいとして，東北師範大学に教員と院生を派遣することとした。

中国の高等教育改革は急激な勢いで進行しており，市場原理の導入によって教育と研究の発展が著しい。そのような中で，1995年に政府は「211工程」（21世紀の100大学を意味する）と呼ばれる施策を打ち出し，国家教育部直属で特別予算を配分する国家重点大学を約100校選定した。東北師範大学は，教育学関連の国家重点大学の一つであり，中国では北京師範大学（北京市）や華東師範大学（上海市）と肩を並べるトップレベルの研究水準を有する総合大学である。本学の教育学関連３専攻１分野では，東北師範大学をはじめとする中国トップレベルの師範大学との国際交流をさらに進めて，将来的にはダブル・ディグリープログラムをはじめとした国際協働教育に取り組んでいきたいと考えている。

（文責：浜田博文）

東北師範大学に先立ち，北京師範大学と華東師範大学においても新たな研究交流のネットワークを構築する端緒を拓く取り組みを行なってきた。2014年度には人間系の教員による訪問団が11月13日から18日の日程で両大学を訪れた。教育学域からは清水美憲教育学・学校教育学専攻長，手打明敏教授，樋口直宏教授，上田孝典准教授の４名が参加した。14日には北京師範大学において，教育学を専門とする教員たちとの懇談が行われ，それぞれの研究関心や共同研究の可能性，教員や学生の相互交流について有意義な議論が交わされた。引き続いて，日本への留学を希望する北京師範大学の大学生，大学院生に対する筑波大学大学院の説明会を開催した。事前にとくに目立った広報ができなかったが，50名ほどの参加者が集まり，教育学に関心を持つ学生も20名ほどが個別相談に集まった。

北京から上海へ移動し，16日には筑波大学の主催，華東師範大学の共催で日中教育フォーラム「人を育てるシステムと方法」を開催した。両国から人間総合科学研究科副研究科長園山繁樹教授と華東師範大学教育学部主任袁振国教授の挨拶に続き，教育学域からは樋口直宏教授が「日本における一般教育のシステムと実際－小中一貫教育を中心に－」の演題で報告を行った。午後は分科会に分かれ，「一般教育分科会」において学校教育・社会教育に関して日中双方の研究成果が発表された。質疑も含め，両国の関心の所在や研究方法の特徴など，熱心な議論が交わされ，今後の継続した研究交流の必要性が示唆されたフォーラムとなった。翌17日には、華東師範大学で筑波大学大学院説明会を開催した。40名ほどの参加者を得て，教育学への個別相談

にも15名ほどが集まった。

北京・上海での説明会はいずれも盛況で，日本留学への関心の高さが伺えた。この説明会をきっかけに，筑波大学への留学を決意した学生もみられ始めている。こうした人間系の地道な研究交流の取り組みが，日中相互の架け橋となる礎を築いていくものと期待される。

以下は，東北師範大学に派遣された院生，牧瀬翔麻氏の報告である。

（文責：上田孝典）

2015年３月17日から同月21日の５日間，筑波大学と東北師範大学の研究交流として，教育学域から吉田武男，浜田博文，藤田晃之の３教員と那楽，村松遼太，牧瀬翔麻の３学生が派遣された。

東北師範大学は，中華人民共和国吉林省長春市にキャンパスをもつ総合大学である。前身の東北大学が1946年に開学して以降，他大学との統合を経ながら，現在では２万人を超える学生が通う大規模総合大学となっている。とくに，教師教育に関しては先駆的な研究拠点に位置づけられ，とりわけ初等教育教員養成の重点機関として，多くの優秀な教員を輩出している。

今回は，将来的な教育研究の連携を見据えて，双方の大学院生同士の研究交流を中心に，学校見学や東北師範大学の学生を対象とした筑波大学の紹介などが，プログラムとして組まれた。

交流の第１日目午前は，政法学院思想政治教育専攻の大学院生25名と研究交流が行われた。派遣学生の村松は日本の道徳教育研究について，牧瀬は教育委員会制度研究について紹介をした。その後の質疑応答では，日本における道徳の教科化の動向，生涯学習社会に対する政策，教育条件整備などについて活発な議論が行われた。中国では，臨海部の都市と内陸部の地方とのあらゆる格差が課題となっている。日中両国ともに地方では学校統廃合が進められているが，中国の場合は通学していた学校が廃校したことで，学校に通えない子どもが増えてきているという。一方で日本の場合は，統廃合後の通学手段などを十分に検討し，教育機会を確保するように努めていることが紹介された。

午後は，日本語を専攻する学部生に対して，浜田教授が筑波大学大学院における教育学関連諸専攻・分野の紹介を行った。日本への留学を検討している40名以上の学生が参加し，熱心に話を聞いていた。教室の都合のため，当初予定されていたとおり１時間ほどで紹介は終了したが，終了後も３教員に個別に質問する学生が多かったため，急遽，教室を用意して，引き続き質疑応答が行われた。筑波大学大学院の教育・研究，学校生活や奨学金についてなど，留学に関する具体的な質問が流暢な日本語で行われた。また，教育学部長を訪問し，学部長からは今後の両大学の教育研究交流に対する期待が述べられた。

第２日目は，附属小学校及び幼稚園の見学を行った。小学校と幼稚園ともに，充実した教育設備環境が整えられていた。幼稚園では情操教育を意識した教育活動が実践され，保護者が製作した模型等がいたるところに設置されていた。小学校では教科担任制がとられ，教師の専門的指導のもとで授業が行われていた。小学校管理職との意見交換会も実施され，児童の安全な通学に苦慮している話があった。日本では PTA や子供会などが登下校の見守り活動をしていることを紹介し，情報交換を行った。

また，附属学校以外にも公立学校を見学した。時間の都合上，授業終了後の下校時間だったが，校門前には児童の祖父母らが大勢集まり，順番に学級担任が児童を連れてくると，自宅まで一緒に帰っていた。一人っ子政策のもとで，祖父母が孫に非常に期待している様子が感じられた。

以上のほかにも，中国国内の教育研究や社会状況について多くの学びを得ることができた。中国の大学院生とお互いの国の教育について意見交換したことは，自分の研究を改めて考え直す良い機会にもなった。このような機会を設けてくださった人間系及び教育学域に心からお礼を申し上げるとともに，東北師範大学で歓待してくださった先生方にも感謝します。

（文責：牧瀬翔麻）